

日本の リサイクルの歴史

小島 理沙 Kojima Risa

神戸大学経済学部 非常勤講師、NPO 法人ごみじゃぱん 事務局長
神戸大学大学院経済学研究科後期課程在学中。同大修士時代にNPO 法人ごみ
じゃぱんを立ち上げ、現在に至る。廃棄物にまつわる社会的な影響等を研究。

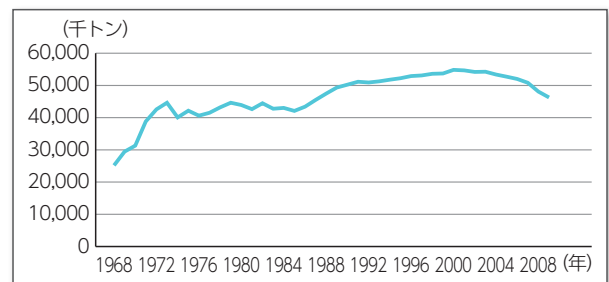
「リサイクル」の言葉の始まり

今や日本では知らない人がいないほどに定着した「リサイクル」という言葉ですが、この概念や意識が導入された歴史はそう古くはありません。高度経済成長期に起こったオイルショックの翌年、1974年に元東大教授の糸川博士が市民活動団体に「リサイクル運動市民の会」という名前を付けたことが発祥といわれています*1。日本語では適切な言葉がなく、リサイクルという言葉は今後、誰にでも分かるようになると断言して導入されたということです。

こうした「リサイクル運動市民の会」は1980年代には関西や名古屋、沖縄など全国のあちこちで誕生してきます。その背景には、廃棄物問題が顕在化した経緯があります。高度経済成長に伴って生産が効率化され、大量生産によって製品価格が下がり、大量消費が可能になりました。国民の所得も右肩上がりでしたので、年々その消費に伴う廃棄物の排出量は増加の一途でした。☒をみると、1968年から1972年まで総排出量が急激に上昇していることが分かります。

夢の島に大量のハエ

急激な廃棄物の増加は、処理能力や処分場の容量を超えて、廃棄物があふれかえってしまいます。人口の多い東京や大阪などの大都市では、最終処分場の建設をめぐる住民と行政の激し



☒ 日本の一般廃棄物の総排出量の推移

ごみの総排出量(環境省)の推移データより筆者作成

い対立や処分場近辺の環境悪化などが出現し、大きく社会問題化しました。特に処分場近辺の環境悪化はすさまじく、1965年、東京都の最終処分場である「夢の島」では大量のハエが発生し、風に乗って住宅地をハエの大群が襲うという事件が発生しています*2。当時は収集した廃棄物を焼却せずに埋め立てていたため、生ごみなどが発酵分解を続け、悪臭や害虫の温床となっていたのです。ハエについては都の消毒作業では追いつかず、警察や自衛隊が出動し処分場自体を焼き払う焦土作戦という対応で何とかおさまりましたが、その深刻さが分かる事例です。

ちなみに、最終処分場といったいわゆる迷惑施設の建設反対運動は、NIMBY問題といい、「Not In My Back Yard」つまり、必要な施設だとは分かっている、自分の裏庭に建設されるのは反対であるというある種の矛盾状態のことを指します。現在でもNIMBY問題は、一般廃棄物の最終処分場問題だけでなく、放射性廃棄物の処分場確保においても大きな課題であ

*1 市橋貴「ゴミと暮らしの戦後50年史」(リサイクル文化社、2000年)
(原典は、石毛健嗣: HOW TO GARAGE SALE、リサイクル運動市民の会)

*2 「東京二十三区清掃一部事務組合 東京23区のごみ処理」
<http://www.union.tokyo23-seisou.lg.jp/shiro/nakattara/02.html>

り、解決が難しい問題として存在しています。

以上のように、日本は、戦後の高度経済成長の結果、大量生産、大量消費、大量廃棄社会を経験し、その結果深刻な廃棄物問題と直面してきました。その問題を解決するために、国民は、全国各地でリサイクルの市民運動や、フリーマーケットを開催したり、分別排出を促進したりなど地道な活動を行ってきました。それを追うように循環型社会形成推進基本法を始めとする廃棄物循環政策に関する国の法整備も進み、容器包装リサイクル法*3や家電リサイクル法*4といった各種リサイクル法が成立しました。国の循環政策の社会基盤が整えられたのは2000年のことですので、日本は、戦後、廃棄物の問題発生から実に30年にわたって廃棄物と戦ってきたこととなります。現在では、どこの自治体においても原則的に分別の徹底が図られるようになり、リサイクルという言葉も当たり前となりましたが、これまでの壮絶なごみの歴史を忘れてはいけないと思います。

江戸時代のリサイクル

「江戸時代はリサイクルが発展していた社会であった」とよくいわれます。例えば、江戸で集められた糞尿が江戸近郊の農家で堆肥として使用され、そこで栽培された野菜がまた江戸で販売されていたことや、使い古した藁草履は、肥料の原料とされていたことなど、物を無駄なく使用し、ごみの排出が少なかった点が注目されています。また、質屋や古着屋といった現在のリユースショップは「八品商い」といわれ、商売として成立していました。嘉永5(1852)年の江戸の八品商人の数は、12,615人*5という規模でした。ちなみに江戸時代の特徴的なリユースショップとして、「献残屋」というものがありました。これは、幕府への献上品の残りや払い下げ品を引き取り、販売したり、再生したりし

て、再び贈答品としてよみがえらせる業者のことです。例えば、参勤交代の大名が将軍に献上する品物、武家相互での贈答品、出入りの承認を得るために行う武家屋敷や役所への付け届け、あるいは火事や雷の見舞い品などが取り扱われていました。

このように循環型社会のお手本として紹介されることが多い江戸時代ですが、ごみ問題がなかったわけではありません。江戸は、各藩から単身赴任者が集まり、藩邸で暮らしながら江戸城へのお城勤めを行う一大単身赴任都市だったため消費型の都市でした。家庭や飲食店から出るごみの排出量も多いため、すべてが田畑に肥料として使用されるわけではなく、空き地や河岸地、川や下水などに適当に廃棄されていました。当然、処分場として管理されていたわけではないのでごみがあふれかえり、新たにごみの集積場所を設けるなど、現在の行政である町奉行所が対策に乗り出しています。また、不法投棄が顕在化して町奉行所とのいたちごっこが続き、それは現在でも不法投棄問題の解決が難しいのと同様に、当時でも手を焼いていました。

江戸時代の日本全体をみると、そのほとんどが第一次産業であったこと、プラスチックのような石油化学製品が使用されていなかったことから、物を再生しやすい環境でした。また、大量生産ではない時代ですので、物自体に希少性があり、リユースが当たり前であったという背景からも、循環型社会が成立していたことは確かでしょう。しかし、人口が集中している都市(消費)型の社会では、現在と同様に循環しきれず、廃棄物問題があったことも事実です。

以上のごみの問題が顕在化するときというのは、人口が増加したり、経済が成長するといった社会変化が起こった際に、処理しきれずあふれかえった状態が社会問題として認識されたときです。しかし、本来ごみというのは、生活の中で日常的に発生するものですので、問題が顕在化する前に、日々の管理や発生抑制に努めることが重要です。

*3 容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律

*4 特定家庭用機器再商品化法

*5 小沢詠美子「お江戸の経済事情」(東京堂出版)